

なぜ9時～9時なのか？

Why from 9 to 9 ?

岡畑恵雄 Yoshio OKAHATA

この原稿を書いている時期は2月の初めで、ちょうど3年生が卒論配属の研究室を決める頃である。3年生が興味ある研究室を訪ねては、「先生の研究室ではどのような研究が行われているのですか？」という公式の質問から始まって、必ず聞いてくるのは、「先生の研究室は9時～9時というのは本当ですか？」という質問になる。「そうだよ」と答えると、「そんなに長い時間研究する事があるのですか？」、「そうだよ。研究は楽しいんだからあつという間に時間がたつよ」というやりとりが行われ、彼らは「ふ～ん」といいながら納得したようなふりをする。何年も繰り返されてきた風景である。

振り返ると、自分も卒論生として研究室に配属されたときに、先輩達が当然のように夜遅くまで実験をしているので、教えてもらっている自分としてはとても先には帰りづらく、つつい9時～9時になる。家に帰ると母から、「もっと早く帰って来れないの？夕食待つの大変なんだから」といわれ、「先に食べておいて。化学の実験は時間がかかって大変なんだから」とわかったような言い訳をする。長じて大学の助手になり、入った研究室でも9時～9時が当然のように始まり、付き合っていた彼女からも「なぜそんな遅くまで働くの？ 残業手当は出るの？」と言われ、結婚式では教授の来賓の挨拶で「新婦をお願いします。新郎が心おきなく研究できるような家庭を作って支えてあげてください」と言われる。新婚旅行に行く飛行機の中で「わかっているけど、あそこまで言われるとね～」と呆れられる。

ではなぜ、9時～9時なのか？ 実験や研究は時間がかかり、はじめるとつい長くなり、帰るのが遅くなる。やっつけて楽しい。時間に制限があると良い研究ができない、など言い訳はいっぱいある。ある著名な先生は「有り余る時間を投入してこそ良い研究ができる」とまでおっしゃっている。もっともである。しかし時間には限りがあり、納得できる範囲として朝は9時

から始め夜は9時までに終われば、次の日も続けられるだろう、12時間もやれば充分だろう、と言うのが長年の経験から出た結論である。

しかし、最近考えさせられることが二つあった。一つは、大学の広報部から電話があり、「先生の研究室のホームページに9時～9時と書かれています、あれは困ります。学生に時間を強要するようなことはホームページに書かないで下さい」と言われた。「別に強要しているわけではなく、研究室の方針を述べているわけで、いやな人は来ないで下さいというメッセージです」と答えると、「でも～」というやりとりがあり、そのままになっている。もう一つは、ある男女共同参画を考えるシンポジウムで、「化学の分野で大学の女性教員が少ない最大の理由は、夜遅くまで実験をすることが当然のような風潮です。あれでは、子育てや家事の負担が多い女性はとて同等の条件では戦えません。明らかに女性に不利です」と言われたことである。たしかに少なくとも自分は家事と子育てをほとんど家内に任せきりにできたおかげで「9時～9時」が実行できてきた。もし、家内も働いていて家事と育児を半々に負担することになれば、保育園への送り迎えや食事の準備でとても毎日の9時～9時は無理であろう。

先日、アメリカとオーストラリアでの国際会議に出席して、夕食後の話題として「9時～9時」の話をした。驚いたことに状況は外国でも同じで、男性だけが働き「有り余る時間を研究に投入できる」グループと、共働きで「多少研究時間をセーブしても家事と育児を分担している」というグループが半々に分かれた。女性教授からはやはり時間の制約という面では女性是不利であるという意見もあった。

来年から研究室に入ってくる学生は、いわゆるゆとり教育世代である。はたして「9時～9時」は彼らにどう受け入れられるのであろうか、と危惧する毎日である。



岡畑恵雄 Yoshio OKAHATA

東京工業大学大学院生命理工学研究科生体分子機能工学専攻・教授
工学博士

1972年同志社大学大学院工学研究科工業化学専攻修士課程修了
専門は、バイオ高分子で、現在の研究テーマはDNAフィルムの機能化と、水晶発振子を用いた生体内反応の解明
E-mail: yokahata@bio.titech.ac.jp